

薫と〈女三の宮〉

——源氏物語第三部の一断面——

吉井美弥子

はじめに

源氏物語研究の現在について考える時、その研究動向を「昭和〇十年代、〱論」といった形でまとめることが可能であった時代は、既に遠く過ぎ去ってしまった観がある。大まかにとらえても、本文研究はもとより人物論・成立論・構想論・構造論・文体論・主題論・表現論といった様々な研究方法を経て到り着いた現在の混沌たる状況において、今後の研究動向を一直線上に見定めることは至難の業と言えるだろう。しばしば指摘されるように、このような現在の多様化かつ細分化した研究状況の下では、いきおいその取り扱いの対象が徹視的になりがちである。もとより、方向性もないままに徹視的分析に陥る弊は断じて避けられなければならない。が、それにしても、表現と表現とが結びつきあって織りなされている物語を前にする時、表現群への徹底的なこだわりから物語全体へと迫っていくことこそが、その本質をとらえる為の最も有効な方法であろうと考える。その意味で、現在の源氏物語

研究の主たる方法をあえて挙げるとすれば、それが表現論的な立場に基づくものであるということになるのももつともなことと言えるだろう。ともあれ、すぐれた源氏物語論が時代の流れや「〱論」といった枠を越え着実に積み重ねられて大きな研究史を築いていることは確かな事実であり、今、私たちに出来ることは、そうした研究史をふまえつつも、さらなる読みの可能性を求めるべく、表現の集積をいかにとらえどこまで物語の本質ににじりよっていけるか、ということに尽きるのではないだろうか。

前置きが長くなったが、源氏物語についての私自身の問題意識の対象は、ここしばらく第三部とりわけ宇治十帖にある。なにゆえに、光源氏没後までもその末裔による物語が繰り広げられなければならないのか、すなわち光源氏という絶対的な主人公を失ってさえなお子孫の物語が展開していかなければならなかった必然性はどこにあるのか、という問題を、物語の内部から探っていきたいからである。もとより、この問題は、これまでも源氏物語研究者によって幾度も提示され様々な読み解きがなされてきた。

そして、おそらくそこにたった一つの完璧な「解」を求めることは不可能であると思われる。それでも、第三部を探っていくことは第一・二部を逆照射することともなるはずであり、源氏物語全体を見通す上で避けて通れない関門であろうと考えられる。本稿は、以上のような問題意識の下で、第三部における表現にこだわりのつつその奥に潜む意味を探り、またそうした表現の断片の集積からとらえうる物語のしくみそのものを読み解くことを意図するものである。

—

第三部において、時折思い出したかのようにあらわれる女三の宮についての記述をどのように考えたらいのだろうか。第三部の中でも、薫と宇治の女君との物語がその主たる展開となっている宇治十帖においてさえもなお散見される女三の宮についての記述は、確かに一見したところ何の脈絡もないように思われる。が、罪の子薫を生んだ女三の宮についての記述に私たちは注目しなればならないのではないか。薫とへ女三の宮⁽¹⁾は、源氏物語第三部の一断面を照らし出すものと言えるのではないだろうか。これまで、第三部における女三の宮及び薫と宇治の女君との関わりについて直接的に考察された見解としては、薫にとっては女三の宮と大君とがイメーじにおいて重なりあい、「母親レベルと恋の相手となるべき女たちのレベルとの境界が曖昧」で、そうした「表現の背後で、母女三宮から大君への雪崩式的移行」が「薫の視線を通して」なされている、とする卓見がある。⁽²⁾すなわち、「へ異郷の

の女」である大君に薫の心が傾斜していくことに「物語以前の神話的恋のへ近親相姦⁽³⁾への胎動」を見、物語の深層における、薫にとつての大君と女三の宮の深いつながりを看取する刺激的な読みである。右の論に示唆されるところ大であるが、しかしながら第三部におけるへ女三の宮⁽⁴⁾の問題には、大君との関連のみで済まされない鍵が潜んでいると考えられるのである。

そこで、まず、宇治十帖に先立つ匂宮三帖におけるへ女三の宮⁽⁵⁾について迎っておこう。匂宮巻、光源氏没後、六条院にそれまで集っていた女性たちは、各々その後の住まいに移っていった。女三の宮もまた、そうした女性たちの一人として次のように記される。第三部に入って最初に女三の宮に関して記された簡潔な一行である。

入道の宮は、三条宮におはします。⁽³⁾

(一三—一四頁)

この後、当然ながら女三の宮は「三条宮」として呼ばれることも多い。ここで、女三の宮が移り住んだ「三条宮」とはどのような邸であったかを確認しておきたい。三条宮とは、柏木との密通により薫を出産した女三の宮が出家を強く望んだ時、それを聞いた朱雀院が、出家した宮を住ませようと考えた邸である(柏木巻・第四巻二九六—二九七頁)。そしてまた、朱雀院が、出家した女三の宮に三条宮への移転を勧めた際に、光源氏がなかなか宮を六条院から手離そうとせず、その一方で、光源氏その人によって三条宮は入念に手を入れ財宝を運び込まれていた、とされる(鈴虫巻・同巻三六六—三六七頁)。そのような三条宮に、光源氏没後、女三の宮は、ようやく——出家後の女三の宮は、結局光源氏が亡

くなるまで六条院に住んでいたということになるだろう——移り住んだわけである。三条宮が、ただ単に光源氏亡きあとの女三の宮の住まいであるというだけでなく、右に述べたような経緯を伴っていた邸であることに注目しなければならないだろう。なぜなら、三条宮とは、女三の宮にとって、朱雀院鍾愛の姫宮としてのそして准太上天皇光源氏の夫人としての威勢の下にあったことが表向きには誇示される場であると同時に、柏木との密通ゆえに若くして出家に到らねばならなかった事情が奥に秘められた場であると考えられるからである。匂宮巻では、さらに、このような三条宮で、勤行に励み子供の薫を頼りにしている母女三の宮に接しつつ、自らの出生の秘密について少しでも自分が知っているなどということをも母宮に知られまいとし、不安と憂愁の思いに閉ざされる薫の姿が描き出されていく（一七—一九頁）。薫にとって、物心ついてから目にしてきた三条宮の女三の宮の尼姿とは、自己の存在の不安をかき立てずにおかない表象であったことになろう。ところが、その一方で、薫は冷泉院からも今上帝からも厚遇されているわけであるが、

内裏にも、母宮の御方さまの御心寄せ深くて、いとあはれなるものに思され、……（一九頁）

とあるように、今上帝が女三の宮の關係ゆえに薫を厚遇しているとされる点は見逃がせない。言わば薫の特質とされる出家への志向と現世的榮華の二つの要素が、いずれも女三の宮と深く結びついていることが明らかにされているからである。そして、前述の三条宮とは、女三の宮にとってだけでなく、薫にとっても右に述べた矛盾しているとも思える二要素をあわせもった場であると言

うことができるだろう。例えば同じ匂宮巻に描き出された、女性關係には消極的な薫ではあるが通り一遍の「通ひ所」は多くあり薫に心を寄せるそうした女性たちが三条宮に数多く集まってくる（二四—二五頁）という部分も薫の持つ二面性を照らし出すものであり、これも、三条宮という場そのものが帯びている二重性を示唆するものとも考えられるだろう。

以上のような薫と女三の宮の関わり及び三条宮の場の機能は竹河巻においても確認されう。竹河巻では、既に指摘されるように、匂宮巻とは異なった語り手の立場から薫がとらえ直されている。が、この時も、

六条院の御末に、朱雀院の宮の御腹に生まれたまへりし君、冷泉院に御子のやうに思しかしづく四位侍従、……（五七頁）

とあるように、匂宮巻と同様、朱雀院の姫宮であり光源氏の夫人である女三の宮の子としての薫像が鮮明にかたどられている。しかも、注意すべきは、竹河巻における語り手が実は薫が光源氏の実子ではないという真相を知っていることをほのめかしている点である。とすれば、右に引いた本文の、薫についての説明自体がきわめて皮肉な色合いを持つてくることとなるであろう。薫にとっての女三の宮の存在は、良きにつけ悪しきにつけ二重の意味を持って重いのである。さらに、この竹河巻では、玉鬘とその子供たちの後日譚が中心となっているが、玉鬘の住む邸と「かの三条宮」が近くにあるという設定である（五七頁）。そこで、薫が時

折玉簪邸を訪れるわけであるが、その結果、薫の出生の秘密を知らない玉簪が、薫の秘密を見抜いてしまうような、薫にとって言わば危険な状況を招くことにもなる。そしてまた一方で、玉簪邸を訪問する夕霧をはじめとする人々がその近くの三条宮に集うこともなり（六一頁）、女三の宮の世間的な意味での高い位置付けがなされるわけである。薫にとつての女三の宮の、そして薫にとつての「三条宮」という場の持つ二面的な意味が、匂宮巻と同様、しかも匂宮巻とは異なつた角度から明らかにされているのがこの竹河巻であると言えるだろう。以上、宇治十帖に先立つ巻々における薫と「女三の宮」について述べてきて知られるように、第三部における「女三の宮」は、一見きわめてひそやかに、その実、看過できない重い意味を持って物語に関わっている。

二

橋姫巻に入ると、悲運な八の宮の物語が語り出される。注目すべきは、この宇治八の宮と薫が親交を始めるようになった経緯である。八の宮が師事する宇治山の阿闍梨が、冷泉院とも親しかつたことからまたま冷泉院に八の宮の話をし、そこに居あわせていた薫の興味をひくに到つた。その時、冷泉院は、

朱雀院の、故六条院にあづけきこえたまひし入道の宮の御例を思はし出でて、「かの君たちをがな。つれづれなる遊びがたきに」などうち思しけり。（一一一頁）

とあるように、女三の宮降嫁の例を思い出して八の宮の姫君たちに関心を持ったのであつた。一方の薫は、むしろ八の宮の方に深

く興味を持ったとある。しかし、女三の宮の例を思い出して心動かされた冷泉院がこのあと阿闍梨の案内で八の宮へと使者を立てたことが、結果的には、冷泉院と八の宮の親交ではなく、薫と八の宮の親交を持たせるきつかけとなつた——冷泉院の使いの案内として宇治へ足を運んだ阿闍梨は、その折薫のことを八の宮に語り、そこで八の宮もまた薫に興味を持ったのである（一二二—一二三頁）——と言えることは重要だと思われる。薫と八の宮は、以後「法の友」としての親交を結ぶようになる。三年後、八の宮不在の折に、薫ははじめて姫君たちの姿を垣間見るが、この時薫の心を激しくゆさぶつたのは、姫君たちよりもむしろ、そのあとであられて女三の宮と柏木の密通に関わる話を語り始めた弁の君であつた。「あはれなる昔の御物語」（一三六頁）を何かついでに薫に告げたかつたと涙ながらに語る弁の話の内容が、女三の宮の密通の件すなわち薫の出生の秘密にまつわるものであることが具体的に示されていくのは「三条宮にはべりし小侍従」以下のことば（一三七頁）からである。「三条宮」女三の宮に仕えていた「小侍従」とは、かつて柏木を女三の宮へ導いた女房であつた。薫が道心を抱くようになっていった所以とはとりもなおさず、出生の秘密に関わる自己存在への不安によるものであり、だからこそ宇治での八の宮との「法の友」としての親交が始まつたわけであるが、かてて加えて、その宇治に自らの秘密を知る老女房弁がいたことは、薫を宇治に引き寄せるのに十分であつたと考えられるだろう。都に戻ってから、薫は、匂宮に宇治の姫君たちの話をして匂宮の関心をあおりながらも、自分自身は姫君たちより

も弁の話の方が気がかりであつたとある（一四七頁）。その後、重ねて弁に会いついに事の真相を聞いて柏木の遺書を読んだ薫が憂愁の思いつのつて参内することもできず、三条宮の女三の宮のもとを訪れる場面で橋姫巻は閉じられる。この場面に見られる女三の宮は、

……いとは何心もなく、若やかなるさましたまひて、経読みたまふを、恥ぢらひてもて隠したまへり。（一五七頁）

と描かれ、薫はそのような姿を目にした時、自分が秘密を知ったことを知られまいと、改めて心に封じこめるに到る。女三の宮と接することによって、薫の憂愁の思いが晴れていくということはないのである。

以上のように橋姫巻を辿つてくると、薫が道心を抱いて宇治へ向かうようになった動機、そして、冷泉院の思いを通じての直接的なきっかけ、さらに薫が宇治に引き留められざるをえなくなった状況の最大の要因に、いずれも、〈女三の宮〉が潜んでいることが明らかになってくる。もちろん、それらは、すべて女三の宮自身の意志とはあずかりしらぬところで薫と関わっているのであり、それが象徴的にあらわれているのが、右のこの巻の最後の場面であると言えるだろう。

薫は〈女三の宮〉により宇治へと引き寄せられていく。これはなぜなのか。この問題を考える前に、続く展開を読み進めていこう。注目すべきは、椎本巻に入つて、八の宮に姫君たちの後見を頼まれた薫が、確かに既に姫君たちを「領じたる心地」（一七五頁）はしていたけれども、八の宮他界後も姫君たちにそれほど積

極的な行動に出ることはなかったということである。それでも、薫が宇治に執着しないではいられない一因となつたのが、もしかすると姫君たちが弁の「問はず語り」から自らの出生の秘密を知っているかもしれないという薫自身の推測であつた（一九二頁）。橋姫巻にひき続き、椎本巻においても、薫が宇治に引き寄せられるのは、〈女三の宮〉と深く結びついていることになる。

ところで、椎本巻における〈女三の宮〉への直接的な言及は、実はただ一箇所きりである。そしてその一箇所が大きな意味を持つていのではないかと思われる。八の宮薨去の翌年の春、匂宮は中の君に手紙を出すが自分の思いを受け入れてくれない中の君を辛く思つて恨み言を薫に言い、匂宮はまた夕霧の六の君との結婚にはのり気でない、という話が記されたあとに続く次の記述である。

その年、三条宮焼けて、入道の宮も六条院に移ろひたまひ、
何くれともの騒がしきに紛れて、宇治のわたりを久しう訪れ
きこえたまはず。（二〇七頁）

そのまま読み過ごしてしまいかねないほどにさりげなく文脈にはさみこまれており、実際これまでとりわけ注目されることもなかった部分であると思われるが、この三条宮焼亡——女三の宮が六条院に移転している点、またこの後、新邸が落成するまでに約一年かかっている点から「焼亡」ととらえてよいと考える——ということは、看過できない意味を潜ませているのではないだろうか。これについてしばらく考えてみたい。

源氏物語全体を見わたしても、邸を火災によって焼失して住ま

い移す、という記述は、右の部分以外には一例しか見られない。⁽⁹⁾それは、橋姫巻で、政争にあやつられた孝句敗れて失意の八の宮が、その上さらに邸までも焼けてしまいついに宇治へと移り住む、という部分である（二一七―二一八頁）。八の宮の邸が焼失したという文脈の背後には、都から八の宮を排除しようとする徹底的なまでの政治的陰謀の影すら窺うことができ、八の宮と宮の家族のその後の生き方を最終的に決定づけたのが、この邸焼失という出来事であったと言えるだろう。また、源氏物語が書かれた時代を考えてみると、確かに政争にまつわるものをはじめとして火災の多かった時代であったと言える。⁽¹⁰⁾そのような歴史的事実に照らし合わせれば、源氏物語に展開する世界とりわけ正篇はむしろ非現実的なまでに安定していると言えるほど火災の記載がないということになるだろう。とすれば、その源氏物語に描かれた邸焼失というただならぬ事件は、右に述べた八の宮邸についてはもとより、三条宮についてもやはり重視しなければならないのではないか。しかも、三条宮とは、第一節で述べたように、女三の宮にとっても、そして薫にとっても重要な場であったわけである。すなわち、物心ついてから若々しい尼姿の母を目にしてきた薫にとって自己の存在への不安がかけ立てられてきた場であり、一方で女三の宮の子としての薫の現世的な栄華を具現していた場でもあった三条宮の焼失とは、薫をそれまでとは別なものへと駆り立てるのに十分と言える事件なのではないだろうか。

確かに、三条宮焼失後しばらくの間は、薫はその取り込みに紛れて宇治を訪れることなく、過ごしている（二〇七頁）とあるも

の、その数行後に重ねて「その年」として語り起こされた次の場面には、実に、それまでの薫とは異なる面が窺えるのである。

その年、常よりも暑さを人わぶるに、川面涼しからむはやと思ひ出でて、にはかに参うでたまへり。（二〇七頁）

少なくともそれまでの薫は、宇治の姫君たちに対してそれほど積極的な行動には出ない人物として描かれていた。ところが、「その年」すなわち三条宮焼失の年の夏、右に見られるように、薫は「にはかに」宇治へと足を運ぶ。その上、この時、偶然にも姫君たちをしかと垣間見てしまう。この鮮烈な体験は、かつての橋姫巻での垣間見（一三一―一三二頁）とは異なっており、薫の心を姫君たち特に大君へと傾けさせる決定的な出来事となった。また、この場面が、宇治十帖には珍しい「夏」の場面であることも、あわせてこの場面が他から突出していることを示すものと言えるだろう。そして、椎本巻が、薫の視線を通じて、姫君たちの様子が具体的に描き出されている場面そのまま閉じられているものも、收拾のつかない薫の動揺を象徴しているものと考えられる。

以上のように見てきた時、三条宮焼失の事件は、確かに薫を変化させていると言えるのではないか。それまでは、自らの積極的な意志というよりはむしろ引き寄せられるかのように宇治に足を運んでいた薫が、三条宮焼失を境として、意志的に宇治へと向かうようになった、と考えられるのではないだろうか。あたかもそれまでの呪縛から解放されたかのように宇治へ向かい積極的な行動をとり始めた薫であったが、しかし次の総角巻では大君との恋に挫折することになる。そしてここでも、三条宮焼失の一件が

薫と深く関わってくるのである。

三

総角巻に入ると、周知の通り、薫は積極的に大君に近付き始める。薫は、弁に大君との仲介を頼む際に、自らの周囲にいる女性たちについて説明するが、その時「三条宮」つまり女三の宮の若々しさと近付きがたさなどを挙げている（二二頁）が、これは、薫にとって大君への接近を合理化するものとして、〈女三の宮〉が用いられていることになるだろう。しかし、薫は大君と結ばれることはなかった。一度めの折には語らうだけで一夜を明かし、二度めの機会には、大君は中の君と薫を結びつけようとして逃げ去ってしまった。薫は大君への思いを遂げられない。その時間わってくるのが、三条宮焼失の一件である。

三条宮焼けに後は、六条院にぞ移ろひたまへば、近くては常に参りたまふ。宮も、思すやうなる御心地したまひけり。

（二四九頁）

「宮」すなわち匂宮は、既に指摘されるように、この時六条院に住んでいたわけではないから、六条院内にある曹司に匂宮が⁽¹³⁾いに折に薫と匂宮とが近づく機会が増えたのとらえるべきであろうが、三条宮が焼失し薫が六条院にいるということが、続く薫と匂宮の宇治行き計画の相談へと結びついてしまっている点は見逃がせない。そして、匂宮と中の君とを会わせ、自分は大君と結ばれようとしたこの計画は、薫が大君に拒まれ、さらに匂宮と中の君の件を知った大君を落胆させるといふ結果を招いてしまった。匂宮

は、中の君を愛するものの、身分柄思うように宇治を訪れることができない。中の君を心配する大君の失望は大きい。そうした大君を、薫が、三条宮が出来上がったらそこに移そうと考えている（二八〇・二八二頁）と繰り返して⁽¹⁴⁾記されることに注目させられる。そして、三条宮が落成せず薫が大君を引き取れずにいるうちに、大君ははかなくなってしまう。大君の死を機に出家の本意を遂げようとも思う薫であるが、「三条宮」女三の宮の思うところをばかり（三二〇頁）、それもかなわない。さらに、三条宮が出来上がったあかつきには、引き取れなかった故大君の代わりとして中の君をそこに引き取ってもよかった、と思っているうちに、匂宮が中の君を二条院に移すことが決定していくのである（三三〇・三三一頁）。

これは、続く早蕨巻でも、念を押すように描き出される。中の君が匂宮によって二条院に移され世間の人々も驚いたとある一方で、薫の方は、いよいよ三条宮の落成も間近となり、近くの二条院へ中の君が渡った様子を聞くにつけても、手に入れようと思えば手に入れることができたかもしれない中の君を失ったという後悔の念を抱かざるをえない（三五四・三五五頁）。以上のように総角巻から早蕨巻を迎えてくると、椎本巻において三条宮焼失の後、自ら意志的に宇治に向かうようになったと考えられた薫がひとたび宇治で恋を成就させようとする時、今度は三条宮が焼失してしまっていることが次々に薫の思いと反する方向へと薫を導いていくべく作用している、⁽¹⁵⁾ということが確認されよう。

続く宿木巻では、新たに「そのころ」と語り起こされ、時間的

にもかかなりまき戻されて、都を舞台とした今上帝の女二の宮の婿選の語が始まる。宇治の世界を相対化すると共に若菜上巻におけるかつての朱雀院の女三の宮の婿選の折を彷彿とさせる部分⁽¹⁶⁾であり、また実際、今上帝自身が「朱雀院の姫宮を六条院に譲りきこえたまひしをりの定めども」(三六六頁)を思い出すことにより、薫と女二の宮の縁談は当然のように進められていく。年立によってこの時期を勘案してみると、薫がまさに自ら宇治に執着していた頃と重なることとなる。とすれば、ここでは薫にとって「女三の宮」が都における自分の不本意な縁談を促進する形で機能していることになると言えらる。翌年——大君の亡くなった翌年でもあるが——の夏、薫と今上帝女二の宮との縁組が決まる。そして、この時既に、薫と女三の宮の住むことになる新三条宮が落成していたであろうことは、早蕨巻の記述(三五五頁)から推し量れることである。

以後、「女三の宮」は、宇治十帖の前半部分においてとらえることのできた方向——薫を宇治へと引き寄せていく——と全く逆の方向——薫を宇治から引き離し、さらに都の世界につながるような方向とする——へと作用していくことが確認される。例えば、故大君への思慕から中の君に執着し、中の君が匂宮との結婚で苦悩していることを知って中の君を匂宮に譲ったことを後悔する薫が、勤行に励む姿を見て、女三の宮が「いと危くゆゆし」と思い、薫に出家を思いとどまらせようと訴える場面がある(三八九〜三九〇頁)。女三の宮の意志的な発言が見られるこの部分は、宇治十帖においてきわめてまれな場面と言えるが、薫は、こうした女三

の宮の意向に反して現世を捨てることはできないのである。また、薫が中の君の後見として現実的な配慮をするような場合には女三の宮が協力的である(四二七頁)ことも、そのことで薫が、都からそして現世から離れようとするものではないことが明らかであるからと考えられるだろう。さらに、女二の宮降嫁に関して、今上帝から女三の宮のもとに手紙があるという場面では、故朱雀院が女三の宮を厚遇していたことからいまだに衰えない女三の宮の威光について語られる(四六四頁)が、これはとりもなおさず、薫の現世的栄華を保証するものである。その際立った形が、女二の宮を、母女三の宮も住む三条宮に移す儀式及び前日の藤花の宴(四六八〜四七三頁)としてあらわれていると考えられるだろう。女三の宮と共に女二の宮が住まう三条宮は、さらに薫を都に位置付けるべく、薫と宇治——薫が大君の代わりとして見出した浮舟——との距離を遠ざける方向へと機能していくのである。

東屋巻では、薫と女二の宮があまり親しんでいないのを親しく心配する今上帝が、女三の宮にそれを告げる場面(八二頁)⁽¹⁷⁾、また、薫が浮舟を宇治に伴った際宇治にすることを「母宮にも姫宮にも」手紙を書いてとりつくるわなないわけにはいかないという場面(九〇頁)も見られる。「女三の宮」は、宇治にひかれる薫をまさに都にくくりつけようとしているのである。そして、これは、明石中宮が宇治にひかれていた匂宮を直接いさめていたとされることと対照的であると言えるだろう。つまり、女三の宮自身は、宇治に関わる薫の行動を直接いさめることはないが、薫にとっては「女三の宮」が結果的に宇治の世界から自らを引き離す方

向へと作用しているということになるわけである。

その意味で、蜻蛉巻で、浮舟の死を知った時の薫が描かれる場面は示唆的であると言えるだろう。薫は、女三の宮の具合が悪かった為に石山に籠って多忙な時であり、浮舟のことも気がかりではあるものの自ら宇治へ向くこともできず使いの者を送るのさえ遅くなってしまふのである（二〇四頁）。

その後、実は浮舟が生きていたことを知って、薫は僧都に浮舟に会えるようまずは小君を使いに出す為のとりはからいを頼む（三六六―三六八頁）が、夢浮橋巻のこの場面、薫が、僧都に対して語ることばの中で女三の宮についてふれている次の部分が、源氏物語における女三の宮に関する最後の言及となる。

いはけなかりしより、思ふ心ざし深くはべるを、三条宮の心細げにて、頼もしげなき身ひとつをよすがに思したるが避りがたき絆におぼえはべりて、……（三六七頁）

幼い頃からの出家志向にもかかわらず女三の宮が心細げに自分を頼りにしていることがはだしとなってこれまで生きてきた、と話す薫であるが、ここで問題なのは、そのように自らの道心を前面に出して語ることによって薫が自己正当化し、そして何とか浮舟に会うことをとりつけようとしている矛盾した点であろう。僧都は、薫の依頼を聞き入れるが、最終的に浮舟は使いの小君とすら会おうとしなかった。薫の感いが記されて物語は閉じられるのである。《女三の宮》は、結局最後まで薫の感いを消し去ることはない。それどころか、《女三の宮》こそが薫の感いを象徴しているとさえ言いうるのである。

四

これまで述べてきた考察を整理しよう。まず、第三部始発部において、「三条宮」という場によって顕著に示されるように、《女三の宮》は、薫のあいまいな二面性——道心と現世的榮華——の本質をあぶり出すものであった。そして橋姫巻から椎本巻の三条宮焼失の前までは、《女三の宮》は、薫を宇治へと引き寄せていく。ところが、三条宮焼失を境として、以後薫は自ら意志的に宇治へと向かう。しかしながら、薫が宇治で恋を成就させようとする時、三条宮のないことが、薫にとって大君・中の君との関わりにおける不如意な結果を次々に導く方向へと作用してしまふ。それでも、浮舟を見出すことによって改めて宇治と関わりうとする薫にとって、今度は、《女三の宮》が、女二の宮をも迎え入れた新三条宮に示されるように、まさに薫を都につなぎとめるべく作用している。しかしながら、薫の思いがまだ浮舟にとらわれているままで物語は閉じられている、ということができるだろう。こうした薫と《女三の宮》の深い関わりをどのように考えるべきであろうか。注目すべきは、《女三の宮》が薫を宇治に導き入れる、薫が自ら意志的に宇治に向かうとした時、薫を宇治から引き離すような形で薫に関わっていることである。しかも、薫は宇治に発した恋の延長上に思いを残している。第三部において、薫は、《女三の宮》に翻弄されるように動き、さまよい、そして女君たちとの恋に挫折し、惑っているということになるだろう。

これまでに、薫の出生と宇治の物語とに深い関わりを読みとり

「柏木の犯しが薫に報い」⁽¹⁹⁾とする指摘、さらにその見方をより積極的に推し進めた上で、薫と宇治の物語とはその「表層の奥に、薫の父柏木との繋がり、絆の恢復を願う意識的・無意識的な志向を低流」させているものであるとする説得力のある論も提示されているが、右のように表現を辿りつつ考察してきた時、薫の宇治における恋と挫折による彷徨とは、むしろ女三の宮の罪の報いを代わって引き受けているものとしてとらえるのではないだろうか。もとより、女三の宮自身が意識的に薫にそうさせているのではなく、女三の宮の自覚していない、そしてまた薫自身も自覚していない物語の深層において薫は女三の宮に成り代わって、彷徨しなければならぬのではないか。いつまでも、若々しく心細げだとされる尼姿の女三の宮は、薫自身のよりどころのなさを象徴するものでもあったと考えられる。そして、三条宮とは、述べてきたように、薫にとって、出家への志向と現世的栄華の両方を醸成し具現した空間であったと言えるだろう。それゆえ、焼失した時には、いったんすべてのものから解き放たれたかのように薫は意志的な行動へと駆り立てられたものの、皮肉にもこの空間こそが薫を支える不可欠な基盤であったということになるのではないだろうか。結局、古い三条宮が新しい三条宮として姿をあらわした時、そこには前よりさらに惑いの色を濃くし、しかも前より一段と現世的栄華に彩られた薫が、また姿をあらわすことになったのであった。

以上、第三部において散見される女三の宮についての記述を手掛かりとして、第三部に内在する薫と「女三の宮」の深い関わり

について考察してきた。第三部とりわけ宇治十帖を読み解くには、宇治の女君たちの側が抱えている問題からも考察していかなければならないことは言うまでもないが、本稿では、薫の側の問題から宇治の物語の展開の必然性を探ってきた。宇治十帖は、そうした薫の側と宇治の女君たちの側の、両者の抱える問題が絡まりあい、せめぎあうところに緊密な世界を形成しえているのである。

注(1)

本稿では女三の宮に関わることがらを登場人物としての女三の宮と区別して「女三の宮」とあらわすものとする。

(2) 長谷川政春「椎本」「総角」(『國文學』昭49・9)、同「拒む女——橋姫・椎本・総角」(『國文學』昭62・11)。なお、傍点・ふりがなとも原文のまま。

(3) 引用本文は全集本に拠り、以下、括弧内には第五巻の頁数を示す。

(4) 薫を「実に孤立無援の、いきなり政治的敗北を約束させられている青年貴公子」とする見方(藤井貞和「王権・救済・沈黙」(『源氏物語の始原と現在』昭55・5所収))もあるが、とらない。第三部の物語世界において、薫は決して政治的に不遇な者として描かれてはいないと言える。

(5) 句宮巻に続く紅梅巻では、薫について殆ど語られない。

(6) 例えば、鬼束隆昭「異説・別伝・紀伝体——竹河巻をめぐって——」(『日本文学』昭50・11)、池田和臣「竹河巻と橋姫物語試論——竹河の構造的意義と表現方法——」(『源氏物語及び以後の物語 研究と資料』昭54・12)等をはじめとした諸論。

(7) 例えば、五八頁。

(8) 六三・六五頁。

(9) 明石巻で廊に落雷し火災がおこる場面(第二巻二二七頁)は除く。

(10) ハの宮邸火災の裏には、都ですべての財宝や遺産を失い、調度ばかりを残して住んでいた(一一六頁)とされるハの宮を、完全な敗者として都から追放しようとする政治的陰謀をそこに読み解きうるのではないか。

(11) 岡本堅次「藤原政権と火災について」(『山形大学紀要』昭39・2)等の指摘に拠る。

(12) 宇治の物語の前半部が、とりわけ秋・冬を舞台にしているという点については、例えば、三田村雅子「源氏物語第三部発端の構造」(『日本文学』昭50・11)等の論がある。

(13) 例えば、玉上琢彌『源氏物語評釈』が指摘する(第十巻三七七頁)ように、匂宮は本来内裏住みあるいは二条院に住んでいたことになっている為、薫と匂宮とが六条院で身近に親しむというこの部分には無理がある。それゆえ、むしろ、ここにこそ看過しえない問題が潜んでいると考えら

れる。

(14) 二九八頁第一三―一四行の薫のことばの中にも同趣の意が窺える。

(15) もとより、大君の側の物語の論理からもそうならざるをえなかったと言えるのであるが、ここではとりあえず薫の側からの物語の必然性を問題として論じる。

(16) 薫山茂雄「薫と中君―密通回避をめぐる―」(『源氏物語主題論』昭60・2所収)。また拙稿「宿木巻の方法」(『国文学研究』昭60・6)でも論じたことがある。

(17) 全集本第六巻の頁数を示す。以下同様。

(18) 例えば、第五巻二六六頁。

(19) 藤井貞和前掲注(4)論文。また、日向一雅「闇の中の薫―宿世の物語の構造―」(『源氏物語の主題』昭58・5所収)も、柏木の子としての薫の宿世の問題を論じる。

(20) 薫山茂雄「薫と浮舟―宇治十帖主題論―」(前掲(16)書所収)。

新刊紹介

森朝男著

『古代文学と時間』

本書は、祭式的時間・神話的時間の濃厚に存在していた古代において、文学にいかなる時間観念が現われているのか、ということ論じたものであり、既刊『古代和歌

と祝祭(有精堂)に続いて、古代文学の本質に迫ろうとするものである。

大きく、Ⅰ「堀辰雄の《純粹な時間》」

序にかえてⅡ「柿本人麿の時間と神話」

Ⅲ「古代文学と時間」Ⅳ「常世とうつせみ

―時間の古代語をたどりつつ―」の四

部に分かれる。本書の中心をなすⅡでは、

人麻呂の作品に仮構された時間と、祭式と

の関わりについて述べる。

本書は、論理の明確さに加え、一語一語に至るまで、著者の心配りが感じられ、まことにすぐれた文学書であるように思われた。御一読を請いたい。

(平1・9 新典社 B6判 一四九頁

九八〇円) [長尾俊太郎]